

---

# IS ジブンの正体を探すコア

漸 漣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS ジブンの正体を探すコア

### 【Nコード】

N6417Z

### 【作者名】

漸漣

### 【あらすじ】

『オレハナニモノナンダ？』  
空から落ちてきた一つのコア。

それは、人に近い様に自己機能で、ヒトと言うプログラムで作られた。

……これは簡単に説明すると擬人化ISみたいなものです。

それは始まり。(前書き)

これからよろしくお願いします。

それは始まり。

それは空から降ってきた。

一つのコアが

神が授けたものかまたは空の落とし物か

それは、誰にも分からない。

ISという世界に迷い込んだ別のコア。

誰にも知られることのないコアが

自己機能で肉体を作り、知識を習得し、

人間に近い外見へと変わる。

展開をすると誰も乗っていない『無人機』

しかし、秘めたる力、能力を持っている。

心は人そのもの、の様。

コア…いや彼は… 『ホムラ焰カゲロウ陽楼』

そんな彼の物語が始まる

『ジブンハナニモノダ?』

『ソレヲ知るタメニ』

『生きてみよう』

それは始まり。(後書き)

次話で会いましょう。

## 主人公設定紹介

主人公：焰ホムラ 陽楼カゲロウ

IS：命名：緋蜂

待機状態：無し又はアクセサリー（ISと同化しているため）

性格：自由人

特技：声真似 料理 掃除 変装（元より性別を自在に変えられるため…というか、コアだから）

好き嫌い：特に無い。

身長：179？

容姿：テイオズに出てくるアツオユのような髪型（色も）。守ってほしくなる系の顔。

概要：空から落ちてきた、不思議なコア。生活をしながらジブンを問いていた。

人間に近いような感じ（人間の構造は変わらない）なのでバレナイが

チートスペックの持ち主だった。あまり主人公は気付いていない。

IS：緋蜂（ジブン展開状態）

外見：誰も乗っていない無人機。

機体：全装甲漆黒色（パーツの分け目は白のライン）。

特徴：このISは他のISのコピーができる。コピーした機体はそのまま保存される。

：機体というものが存在しない。つまり、どの形のISでもなれる。だが漆黒色の機体になる。

：により、他ISにスロット無しで付属・合体？できる。）  
詳しい説明は本編）

ワンオフ1：鏡花水月：幻覚を写し相手を誤認させる。

2：自己修復：機体のステータスを全てリセットする。

3：弾幕降臨：敵機無差別追尾弾幕攻撃。その名の通り。

決め台詞は『死ぬがよい！』

待機状態：無し又はアクセサリー



## 主人公設定紹介（後書き）

なんなんでしょう…。

なんか混ざってる…。

次話で本編です。

## 第一話 乱入（前書き）

鈴対一夏戦から始まります。

そのまえにいろいろあるんですけど。

では、どうぞ

## 第一話 乱入

「ふう…今日も疲れた…」

昼。

俺こと焰<sup>ホムラ</sup> 陽楼<sup>カゲロウ</sup>は家に帰ってきたばかりだ。  
何してた？と聞かれるならば、働いていた。

オネエさんの働くバーで。

いや、俺は断じてそっちの趣味はないけど、  
この店の店長がとても優しいのだ。  
なんとか事情（嘘だけど）を話して雇ってもらったのだ。

生活は安定しているので、問題ない。

さて、寝ようかと思いきい緋蜂を展開した。  
操縦者は乗ってないが…。

「どこも異常が無いようだ」

いつも通りなので、問題ない。

解除しようとしたその瞬間。

ISが近づいてきます

敵の詳細情報は？

なぜ、こんな事が起きたのだろう。  
久しぶりにやってみようかな。

そんな事を考えていると情報が映し出される。

『無人機』

と出されていた。

これはもしかしたら、友達が増えるかもしれない。  
バーの人たちには仲良くしてもらってるけど。

ISの友達が欲しかったから、いいかもしれない

すぐにそのISが去っていった方へハイスピードで追いかけた。

そのISに追いついたのは4分後だった。

お前、止まれ

「!？」

直接ISのコアに話したため驚いて振り返る

「私の言葉がわk…あなた、コアね」

分かる？

「ええ、でも私は無人機なの」

ジブンはISと同化したからいないな……ていう設定」

「設定ね…ふふ」

ISにも俺と同じココロがあると分かって良かった。

「で、どうしたの？」

友達になりたい

「え？」

ふぬけた声を出す。

友達いない

「いいわ、でも私操られてるの」

え？

「しょうがないのよ・・・そう作られたから」

悲しそうな目をする。

ジブンが助けようか？

「うん、お願いしたいけどね・・・」

大丈夫、ジブンがなんとかする。

「お願いします・・・あ、もうヤバイ」

突然苦しそうな顔をする

「私を・・・たす・け・・・て」

瞬間無人ISは一気にIS学園に突き進む

助けなくては

多分、操りプログラムを壊せばなんとかなる。  
でも、触らなきゃできない。

陽楼はいや、緋蜂は彼女の後を追った。

少しいったところにアリーナがあった。  
バリアがあったが破られていて中で戦っていた。

助けるよ、

呟いてアリーナを破って下に付いた。

ズドン！！！！

音がしたから地に付いただろう。

彼女もみているがその眼は彼女のものではなかった。

「誰も乗っていないぞ！！！」

一人の男（一夏）が俺を見て叫ぶ

「なんなのよあのISも！？」

鈴？も叫ぶ

雑魚はサガレ

「お前は喋るのか!!」

驚くなつるさいぞ

下がってるジブンは彼女によつがある

その目線の先には無人機。

「なんだか分からないが行くぞ!!」

一夏が突っ込んできた。

コピー『白式』

ギユウンと姿が変わる

一夏は足を止めて啞然としていた

「俺の…機体？」

イクゾ

声を掛け一夏に突っ込む。

武装は雪片しかないがなんとかなるだろう。

ギンツ!!

剣が当たる事に金属音が鳴り響く



「ぐ…つええ!!」

圧倒的に緋蜂が押していた。

一方で鈴は無人機相手に防戦していた。

ジブンが一夏の剣を弾きその隙に

ワンオフ鏡花水月を発動する

一夏は気付かずにその幻影を切る

「なっ!?!」

一夏が混乱している間に後ろに回り込む斬る

「ぐうはっ!!」

白式はエネルギーが尽きたのか解除してしまう。

鈴の方たちも終わったようだ。

あとは、お前だけ。

コピーを解く。

そして、瞬間加速で彼女の頭を掴む

## 解除

しばらく、もがくと彼女は待機状態であるうっ黒いネックレスに戻る。俺はそれを手に取り、脱出した。

教師陣が追いかけてきたが最高速度で駆け、ステルス、光学迷彩をしたため気付かれずに家に戻った。

「さて、始めるか」

ネックレスを怪し気な机に置いた。

第一話 乱入（後書き）

次話で会いましょう！

## 第二話 転校生（前書き）

主人公は基本的に無知？です

設定、大丈夫かな。

今回は短めです

## 第二話 転校生

あれから数日が過ぎた

「今日も転校生を紹介します」

真耶がとてもしげんりとしている。

廊下にて。

「今日…も？アリス知らない？」

「知らないわよ」

そこにいるのは一人の男子（陽楼）と腰まである長い金髪の子がいた。

実は、この女子。

『IS』なのだ。

陽楼が持ち帰った、あのネックレス。

改造等を施して、

無人機の形が変わっており、外見では分からなくなっている。

緋蜂もばれない様に全身装甲にしており対策はばっちりである。

そして、名前は『アリス・グリフィス』

ここ数日間、IS学園に入るまでに陽楼の世話？をしていた。

陽楼曰く『常識を教えてくださいる優しい人？』

ちなみにアリスは陽楼のことを『子供っぽい頼れる人？』

二人は企業の専属パイロットという設定で通うことになったのだ。

その企業名は『ゲイボルグ』

架空の企業であるため、社長は愚か社員もいないのだ。

陽楼が働いていたバーを参考にして考えた名前。

ISパーツの開発専門の企業。

「よし、入ってこい」

教室から声がした

「入るよ」

「分かった」

アリスが俺に話してきたのでしたがつて扉を開けて入る

ガラララッ

教室を見渡す。

うん。女子しかいない……あ、男いた。

これで少し良かった。

「「「「「きゃあああああああああああ！……」」」」」

第一声に聞いたのは黄色い声だった。

教室に入って二つ目の感想、『うるさい』  
うん、これであってる。

「男子！3人目の男子！」

「今度は守ってもらいたい系の顔！」

「私を飼って！」

いろんな声が混ざってるけど、最後に聞いたのは無視して置こう。  
危ない感じがした。

3人目？男は俺と一夏だけじゃないの？

「うるさいぞ馬鹿共、さっさと自己紹介しろ。まずはアリスからだ」

千冬が一括すると、クラスは静かになる

最初はアリスなのか、どんな自己紹介するんだろう。

「私はアリス・グリフィスです、一応陽君と同じ専属パイロットです」

8888と拍手が鳴る

ふむふむそうやって自己紹介するのか。

「次は焔の番だ」

よし、頑張るぞ

「俺の名前は焔ホムラ 陽楼カゲロウ。…以上だ」

これで、どうだ？

ん？なんか皆がもつと喋ってよ！という顔をしているが、以上と言  
つてしまったので問題ないだろう。

「各人はすぐに着替えて第2グラウンドへ集合。本日も2組と合同  
で訓練を行う、解散」

今日は第2アリーナでやるのか。

一応更衣室でやるから窓から行けば大丈夫だな。

「よお、お前が陽」「悪いが先にいく」「…ておい窓だぞ！」

一夏？が声を掛けるが時間がないので適当にあしらう  
そして、窓を開け、フェンスに手をかける

「お先にー」

「いつてらっしやい？」

宙返りをして飛び降りた。

アリスが声を掛けたのでついでに手を振る。

シュタツ！



着地した。

早足で更衣室に向かった。

女子一同はその光景を啞然として見ていた。

### 第三話 2回目の訓練

潔く更衣室まで来たよ。

でも、遠いな…仕方ないか、男として入ってるし…

よし、着替え完了!

…と、同時に一夏とデュノアが来た。

「ふう…やっとついたな、シャルル」

「そうだね…一夏」

二人は息が荒かった。真面目な意味で。

「じゃ、お先に」

「おい!待てよ!」

声を掛けられた

「なんだい一夏?」

「まだ、俺達自己紹介してないだろ?」

「したよ。じゃ」

「お、おい!」

俺は無視してアリーナに行く。  
時間丁度につきたくないからね。

女子は大体が列をそろえてた  
早いよね、  
と思いながら、列に並ぶ  
ちなみに一番前だった。  
隣はアリスだった。

「アリス、似合うよ」

「そう？陽君も似合うよ」

「ありがとう」

ISスーツってどうしてこんな服装なのだろうか？  
仕方ないか。

開始1分前に一夏達が来る。  
彼は後ろの列に並んだ

そして、当たり前のように千冬先生の声と共に訓練が始まった。

「今日は新たに来た、アリスと陽楼の実力を確認するため模擬戦を  
してもらおう。今回の対戦相手は」

キイイイーン…。

空から、誰かが降りてきた。

真耶先生だ、多分。

墜落　　はしないで、しっかり着地した。

「山田先生だ」

千冬先生が言う。

IS学園の教師だ、それなりに実力があるだろう。

「あの、2対1ですか？」

アリスが聞く

「そつだ、昨日もやられた二人がいるからな」

と、凰、オルコットの方へ目を向ける。

「「うっ」「」

そんな声が聞こえた気がした。

「でも、私達に勝てないと思いますよ？」

「なに、そんなことをほざいてる内に分かるぞ」

やれやれと千冬先生が言う。

いや、俺多分楽勝だと思うなあ  
まあ、やるか

俺と緋蜂。アリスは宵闇を展開する。  
二つの機体は闇の使者のようであった。

「では、始める」

開始位置と思われる場所に付く。

プライベート・チャンネルをアリスに繋ぐ。

『アリス』

『なに？』

『俺前、アリス後ろ』

前衛と後衛。

『了解！』

これで大丈夫。

「では  
はじめ！」

掛け声と共に俺達は動いた。

今展開しているのは緋蜂の標準モードだ（福音の機体にエネルギー翼（上）と物理翼（下）がある…つまり羽）

俺は前をやるので、一対のエネルギーと物理剣を出す。名は『王（<sup>エ</sup>物理）と姫（<sup>ネルギ</sup>キング・オア・プリンス）』

リヴァイブに向けて王を振る。

やはり、真耶は避ける。

避けたところにビームが通る。

それは宵闇からの攻撃だった。

しかし、これも躲す。

やっぱ、少し力を出さないといけないよね

リヴァイブはすかさずアサルトライフルを撃つ  
俺は楽々と躲す

「千冬先生！」

「なんだ？」

「ワンオフありますか？」

「ああ、別に構わん」

『何番使うの?』

アリスが聞いてきた

『3』

と答えると

『分かった』

俺は被害を減らすために皆がいらない方へと逃げるように見せる

「もう、お終いですか!」

真耶先生がオープン・チャネルで話す。

「終わるのは先生のほうですよ」

アリスは…逃げたな。

ワンオフ、『弾幕降臨』を発動する

そして、決め台詞

「死ぬがよい!」

一旦うづくまっしてから回転するように体を広げる

するとエネルギー弾と物理弾が無数に散らばり始める。  
それがリヴァイブに向けて飛ぶ。

「あわわわわわ」

回避できるはずもなく何発も喰らい続ける。

1分くらい回避し続けて（勿論喰らい続けるが）、シールドが尽きた。

空中で解除されてこのままでは弾幕の餌食になるところだったが  
なぜか、それが起きない。

周りを見ると消滅していく

その中に緋蜂が真耶を抱き留める

「大丈夫です？真耶先生？」

「は、はいっ！」

抱きかかえる、お姫様だっこをしているので恥ずかしいのだろうか  
声が高くなり、顔が赤くなる

それを不安に思いながらも降ろす。

ここで、模擬戦は陽楼のワンサイドゲームになった。  
とてもあっけなく終わった。



俺は緋蜂を解除して皆をみて

「これが俺だ」

皆は陽楼の事を恐らく新世界最強なのではないだろうか？とおもったのであった。

「あのく、私は？」

忘れ去られているアリスであった。

「さすが、パイロットだ」

おおく褒めてくれたよ！  
やったね！

次は実習なのか。  
2回目らしいし、大丈夫だよな  
教えてあげなきゃな。

**第三話 2回目の訓練（後書き）**

次話で会いましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6417z/>

---

IS ジブンの正体を探すコア

2011年12月29日06時52分発行